

前回、視覚に障がいのある子どもたち特有の行動について、その背景と、社会適応という観点から考えることの重要性をお話ししました。今回はその続きとして、「見える世界を意識すること」がなぜ大切なのか、具体的なお話も交えながら、さらに深掘りしていきたいと思います。

これを読んでくださっている晴眼者の皆様は、日常生活の多くを「見る」ことから学んで成長してこられたことと思います。例えば、人前ではあくびをする時に口元に手を添えること、着替える時にはカーテンを閉めること、暗くなってきたら電気をつけること。こうしたマナーや習慣は、私たちにとって当たり前の行動かもしれませんが、これらはすべて「他者から見られている」という意識から生まれるものです。

しかし、生まれつき視覚に障がいのある子どもは、この「見られている」という感覚を自然に得ることが困難です。そのため、教室で無意識にあくびをしたり、雨の日の薄暗い教室で電気を点けずに座っていたりするのです。ある生徒は、ガラスが透明であるという認識がなく、窓さえ閉めていれば安心と思って、カーテンを引かずに堂々と着替えをしていました。

適切な行動について、一つ一つ丁寧に教えていくことは、教師や保護者の責務だと考えています。あくびのマナーなどは教えておられることと思いますが、全盲の子に電気を点ける指導をすることや、ガラスが透明だと教えることなど、考えたことはありますか？

視覚障がいのある子どもたちが成長し、社会に出たときを想像してみましょう。外から丸見えて着替えたり、暗い家に電気をつけずにいたりすれば、犯罪の標的になることもあり得るのです。人から見られている意識をもつことは、安心・安全な社会生活には欠かすことができません。そのことを心に留めて、日々の指導に当たっていただきたいと思います。

マナーに関して、今も印象に残る出来事がありました。ある講演会で講師の方が「マナーは気持ちがあれば自然とできるものです」とおっしゃったのです。しかし、これは視覚に頼って行動を学ぶことができない者には、当てはまりません。それは丁度、外国人がお辞儀の仕方を知らないのと同じです。いくら相手に対する感謝や尊敬の気持ちがあっても、そこでどのように頭を下げるか、具体的に教えてもらっていなければ、決して自然にはできないのです。こうして見ると、見えないというのは、ある意味「異文化」の中で育っているようなものかもしれません。その異文化育ちの子どもたちを、見える文化へ適応させるのですから、その指導には気の遠くなるほどの時間と労力が必要になることもあるでしょう。しかし、彼らが学べるチャンスは今しかないのです。私自身も、大人になった今、日常の様々な場面で、周りの人がどう振る舞っているのかが分からず「ああ、盲学校の生徒だった頃に、こういうことをもっと教わっておけばよかった！」と思うことが多々あります。

見える世界を知らせることには、マナーの習得、社会化といったこと以外に、彼らの豊かな心を育むという側面もあります。私自身生まれつきの弱視で、割と早期にほとんど見えなくなったため、正常に見える世界というのは、想像の限界を感じます。何かとてもすごいことなんだな、と思うのが精一杯です。ましてや、見えるという経験を一切したことがない子どもたちが、見える世界を理解するのは、どれほどたいへんでしょうか？

「透明なコップに透明な水が入っているのに、どうしてどこまでが水なのか分かるの？」

「月って岩だらけの星なのに、何がそんなに綺麗なの？」

「空が青いと、顔色が蒼いの『あおい』は同じなの？」

見えていたなら何の疑問も感じないこれらの問いに、あなたはどうか答えますか？

これらの疑問に丁寧に向き合い、答えていくことで、彼らの中に自分なりの「見える世界」のイメージが育まれていきます。それは、単なる知識ではなく、好奇心を満たし、彼らの内面をより豊かにする力になります。そしてこの力は、将来、他者とのコミュニケーションを深めるための大切な土台となることでしょう。誰かと旅行に行って、景色の素晴らしさや面白さを説明された時、その言葉からどれだけ景色を思い描けるかは、その子がこれまでに培ってきた視覚イメージ力によって大きく変わってくるからです。

ともすれば、見えない子には、視覚的な話を避けて音や手触りのことばかり言ってしまうがちですが、「見える世界」を意識させることは、このようにとても大切なことです。社会での正しい振る舞いを身に付けると共に、彼らが他者との感動や経験を共有し、人生を豊かにするための力となるのです。私たち一人ひとりが、このことに改めて向き合い、日々の指導や関わりの中で「見える世界」への興味を育てていくことの重要性を感じています。